

マタイ 27:32-44

32 そして、彼らが出て行くと、シモンというクレネ人を見つけたので、彼らは、この人にイエスの十字架を、むりやりに背負わせた。

33 ゴルゴタという所（「どくろ」と言われている場所）に来てから、34 彼らはイエスに、苦みを混ぜたぶどう酒を飲ませようとした。イエスはそれをなめただけで、飲もうとはされなかった。

35 こうして、イエスを十字架につけてから、彼らはくじを引いて、イエスの着物を分け、36 そこにすわって、イエスの見張りをした。37 また、イエスの頭の上には、「これはユダヤ人の王イエスである」と書いた罪状書きを掲げた。38 そのとき、イエスといっしょに、ふたりの強盗が、ひとりには右に、ひとりには左に、十字架につけられた。

39 道を行く人々は、頭を振りながらイエスをののしって、40 言った。「神殿を打ちこわして三日で建てる人よ。もし、神の子なら、自分を救ってみろ。十字架から降りて来い。」41 同じように、祭司長たちも律法学者、長老たちといっしょになって、イエスをあざけて言った。42 「彼は他人を救ったが、自分は救えない。イスラエルの王だ。今、十字架から降りてもらおうか。そうしたら、われわれは信じるから。43 彼は神により頼んでいる。もし神のお気に入りなら、いま救っていただくがいい。『わたしは神の子だ』と言っているのだから。」44 イエスといっしょに十字架につけられた強盗どもも、同じようにイエスをののしった。

【序論】

マタイ福音書の頂点に到達しました。主イエスが十字架に架けられる究極の場面です。十字架とは、イエス・キリストの象徴そのものでしょう。十字架は主イエスの生涯の目標／目的でありました。ところが不思議なことに、これほど重要な十字架の出来事でありながら、福音書にはその苦しみの実情がほとんど描かれていないのです。2004 年の映画『パッション』では、おぞましい鞭打ちや十字架刑の様子が生々しく描かれており、その凄まじさにショック死した人が出たほどでした。そのような惨たらしさを私たちは知る必要があるのかもしれませんが、どの福音書記者も不思議とそのような描写はほとんど分らないくらい控えているのです。マタイに関して言えば、「彼を十字架につけた」（σταυρώσαντες [δὲ] αὐτόν）と僅か二語だけで完結してしまっている。このことから、マタイが関心を抱いているのは「十字架の意味」であることが分かる。とりわけユダヤ人全体による嘲り、詩篇 22 篇の記事との関連を表そうとしているようです。読者はそのメッセージを注意深く聞き取らなくてはなりません。

【本論】

本論 1. クレネ人シモンが負った十字架

そして、彼らが出て行くと、シモンというクレネ人を見つけたので、彼らは、この人にイエスの十字架を、むりやりに背負わせた。(27:32)

主イエスは総督ピラトによって死刑判決が言い渡され、ローマの兵士たちによって散々暴力と嘲笑を浴びせられた挙句、ついに十字架刑に処せられるため歩み出されました。十字架に架けられる人は、その横木を自ら背負って刑場まで行かなくてはなりません。そこには見せしめの意味があった。主イエスは「十字架を負う」というご自分の教えを文字通り実践されたわけです。

しかし、主が弟子たちに繰り返し求めておられた「自分の十字架を負ってわたしについて来なさい」(10:38、16:24)という教えは、実際には象徴的な意味合いが強かったと思われます。これは、福音のため、イエス・キリストのために自ら背負っていく重荷であり、進んで誰かのために苦しむことを喜んで受け入れていくことです。誰かの救いのために涙と汗を流し、隣人が慰めを得ていくために自分をささげることです。しかし、ここでは主イエスはまさに文字通りに十字架を負っておられる。そして、その姿には多くの人のために自分のいのちを捨てるという、主の決意が表れております。

主は重い十字架の横木を背負って歩み出されましたが、前夜からあちこちの法廷を引っ張り回され、一睡もしておらず、ひどい暴力と鞭打ちで血だらけ^{あざ}瘡だらけになっておられたはずですから、もはや歩くことすらできないほど疲弊しておられた。やむを得ず、ローマ兵はたまたまそこに居合わせた一人の男を捕まえ、無理矢理主の十字架を背負わせました。彼は「クレネ人シモン」として知られる人物となりましたが、元々主イエスとは縁もゆかりもなかったはずなのです。クレネというのは、北アフリカのキュレナイカ半島の首都で、離散のユダヤ人が多く住んでいたと言われます。シモンという名前からしてユダヤ人であることが想像できますが、彼は過越の祭の巡礼のためエルサレムを訪れていたのでしょう。そこでたまたま、イエスという指導者が捕まって処刑されるという噂を聞いたから見に行ってみたところ、思わぬ災難が降りかかったのです。シモンは自分の運命を呪ったかもしれません。人々の嘲りの中を、見も知らぬ囚人と共に歩いて行く。ピラトが判決を下した場所から刑場までは、およそ 300～500mあったと言われています。現在では、この道は「悲しみの道」(Via Dolorosa)と呼ばれ、観光の名所になっています。

シモンは自ら十字架を背負ったものではありません。これは「負わされた十字架」なの

ですが、それは何と神の子イエス・キリストの十字架だったという、とてつもない光栄だったのです。彼の中にはもちろんそんな意識はなかったことでしょう。しかし、囚人イエスの振る舞いを見て、また十字架上のイエスの気高い姿を見て、彼は何かを感じたと思われます。このナザレのイエスという男の内には、他の囚人が持つ暴力性が微塵も感じられない。それどころか、嘲りの嵐の中にあっても黙し、彼らの赦しのために祈る姿にふれた。シモンは主イエスの死を見届けたはずです。そして、主が復活されたとき、この方がまことにキリストであったことを信じたのではないのでしょうか。マルコ 15:21 では「アレキサンデルとルポスとの父」という説明が加えられているところを見ると、どうも1世紀のキリスト教会内でよく知られていた人物であるようです。彼は信仰を持ち、今度は自ら進んで、本当の意味で「十字架を負う」生き方へと導かれていったのだと思われます。

本論 2. 苦しみを舐め尽くすイエス

ゴルゴタという所(「どくろ」と言われている場所)に来てから、彼らはイエスに、苦みを混ぜたぶどう酒を飲ませようとした。イエスはそれをなめただけで、飲もうとはされなかった。

(27:33-34)

「ゴルゴタ」という場所は、有名な刑場だったのでしょう。多くの人骨が転がっていたことから「^{どくろ}髑髏」と呼ばれていたのか、髑髏の形をした場所だったのか。いずれにせよ、多くの命が奪われた血生臭く不衛生な所で、ただならぬ臭気が漂っていたと思われます。

「苦みを混ぜたぶどう酒」とは、十字架の痛みを和らげるための鎮痛剤のようなもので、エルサレムの貴婦人の配慮によって死刑囚に与えられていたものです。しかし、主はそれを受けることを拒絶なさった。ここにはどのような思いが現れているのか。主は十字架の苦しみを余すことなく舐め尽くそうとされたのでしょうか。十字架は主イエスにとって「苦き杯」。多くの人の罪を背負って十字架に架かるのであれば、罪に対する神の怒りのすべてを自分は味わわなければならない。そういう思いから、差し出されたぶどう酒を拒否なさったのだと思われます。まさに、私の（そして、あなたの）重荷を負い尽くすために、主はこのように行動されたのです。

こうして、イエスを十字架につけてから、彼らはくじを引いて、イエスの着物を分け、そこにすわって、イエスの見張りをした。(27:35-36)

十字架の下では、死刑執行人たちがイエスの着物を裂いて分け合うということをしていました。これは当時、このような役割を担った者たちに与えられるささやかな利益だったと言われていますが、実際にはそこまで価値のある物だったわけではないでしょう。

よって、想像するところ、彼らはゲーム感覚でこれを行なっているように見える。しかし、彼らのこの侮蔑的な行動の中にも、著者マタイは旧約的意味を読み取っているのです。ここから、詩篇 22 篇の聖句が次々と成就していくのを見ることになります。

彼らは私の着物を互いに分け合い、私の一つの着物を、くじ引きにします。(詩篇 22:18)
この詩篇の預言の成就がさりげなく描かれている。同時に、私はこのところに、主イエスの持てる最後の小さな持ち物さえも罪人のために用い、与え給うたという意味を見出しました。主イエスは最終的にいのちをお与えになるのですが、主に属するものが何一つ無駄にならないように、この無に等しい衣服さえも、取るに足らない異邦人に分け与えられたのです。冒瀆者にまでも恵みが注がれる。

また、イエスの頭の上には、「これはユダヤ人の王イエスである」と書いた罪状書きを掲げた。そのとき、イエスといっしょに、ふたりの強盗が、ひとり右に、ひとり左に、十字架につけられた。(27:37-38)

罪状書きとは、その死刑囚が何の罪で処刑されるのかを明示するためのものですから、「**ユダヤ人の王イエス**」と書かせたピラトの意図としては、自らを王と名乗ってローマ帝国に反逆したユダヤ人の首謀者という意味を持たせていると思われます。左右に並べられた「**強盗**」も政治的反乱者であったが故に十字架に架けられていたはずですから、その真ん中に置かれた主は、罪人の中の罪人、反乱者の親玉という意味になるでしょう。ピラトは「どうだ、ユダヤ人ども、これがお前らの王だ。こんな惨めで何一つできない男に貴様らの人生を委ねるのか」という嘲笑を込めているのでしょう。主はこうして、罪人の王、罪人の救い主となられた。ピラトが皮肉として描いた「ユダヤ人の王」という表現の中に、彼自身も意図しなかった真理が含まれているのです。

本論 3. 嘲りの言葉に含まれる真理

道を行く人々は、頭を振りながらイエスをののしって、言った。「神殿を打ちこわして三日で建てる人よ。もし、神の子なら、自分を救ってみろ。十字架から降りて来い。」(27:39-40)
ここからは、ユダヤ人のあらゆる立場の人々の嘲りが始まっていきます。ここにも詩篇 22 篇の成就が見られる。

私を見る者はみな、私をあざけります。彼らは口をとがらせ、頭を振ります。(22:7)
頭を振るとは、嘲りの表現。野次馬たちは、かつての主イエスの救いの御業の数々を知ってか知らでか、もはや役に立たぬメシヤとして棄てたのです。「**神殿を打ちこわして三日で立てる人**」とは、主がかつて語られた「**この神殿をこわしてみなさい。わたしは、三日でそれを建てよう**」(ヨハネ 2:19)ということばに基づきます。ヨハネが「しかし、イエス

はご自分のからだの神殿のことを言われたのである」(ヨハネ 2:21) と説明を加えているように、主イエスは十字架でいのちを捨てること、三日の後に甦ることを暗示しておられたのです。しかし、この十字架の場面でこのことばが取り上げられ、人々の口から出ているということにも驚かされませんか。彼らは意図せずして、この御言葉が実現していることを表してしまったのです。嘲りの言葉の内に真理が含まれている。

同じように、祭司長たちも律法学者、長老たちといっしょになって、イエスをあざけって言った。「彼は他人を救ったが、自分は救えない。イスラエルの王だ。今、十字架から降りてもらおうか。そうしたら、われわれは信じるから。(27:41-42)

この宗教指導者たちの言っている事柄にも注目です。「他人を救ったが、自分は救えない」。これは、嘲って言った言葉でありながら、主イエスの本質を見事なまでに表現しているのです。主イエスは確かに多くの人々を救い、この十字架上でまさに全人類の救済のために苦しんでおられる。そのために、ご自分を救おうとはなさらないのです。「十字架から降りてみよ」。そうしようと思えばできたことでしょう。しかし、敢えて神の子としての特権や力を用いることをせず、苦しみに耐える。ここに、他人を救うが自分は救わないキリスト・イエスの本質があるのです。

私が東京基督教大学在学中に理事長をなさっていた吉持章先生は、昨年天に召されましたが、その若き日にキリストと出会われました。先生の鋭い眼光は、一見ヤ○ザのボスとも見紛うような出立ちであります。かつてはそのような極道の道に進むことさえ考えておられたようです。しかし、ある伝道集会で、ナザレのイエスは「他人を救ったが、自分を救わないメシヤである」という話を聞いて、大変に心が動かされた。人間は人を自分に仕えさせようとするものだが、それとは正反対の生き方をしたイエスとは、一体どんな救い主なのか。そのようにして求道に入られたといいます。

彼は神により頼んでいる。もし神のお気に入りなら、いま救っていただくがいい。『わたしは神の子だ』と言っているのだから。」イエスといっしょに十字架につけられた強盗どもも、同じようにイエスをののしった。(27:43-44)

このところにも、詩篇 22 篇との関連がある。

主に身を任せよ。彼が助け出したらよい。彼に救い出させよ。彼のお気に入りなのだから。(22:8)

マタイは明らかに、嘲る人々の言葉の内に隠された真理を読者に読み取らせようとしています。マタイのポイントは人々の嘲りにある。その言葉に現れた真理にある。そして、それを耐え忍ぶ主イエスにある。十字架上においてさえ、それも両サイドにいる真の犯罪者たちにまで罵られる主イエス。しかし、その「苦き杯」を最後まで、一滴残らず飲み干す主イエスの内に、真の救い主の姿を見出させようとしているのです。

【結論】

十字架の場面はまだ続きますが、今日の箇所はマタイ福音書の頂点であると言ってよいでしょう。主イエスの生涯の到達点です。十字架上の主イエスから、私たちは何を讀み取るべきか。それは、主が誰のためにこの壮絶な苦しみを耐え忍んでおられるかということです。それは、私のため、あなたのためではありませんか。この十字架において、旧約の全体が成就しているのです。待ち望まれた救いが完成に至ろうとしている。救いの門が開かれ、この福音にふれる人々を招いているのです。

【祈り】

苦難のしもべ、イエス・キリストの父なる神様。長いゴルゴタへの道を歩き、抵抗することなく十字架に上げられ、あらゆる罵りの言葉を耐え忍ばれた主の御姿を仰ぎます。冒瀆者たちの嘲りの言葉の内に、主の本質が現れていたとは不思議なことです。まさしく、主は「自分を救わぬ救い主」として、私たちの重荷を担い、苦しみを舐め尽くされました。私たちはこの方を我が救い主として信じます。ただ一人、私たちを救うことのできるお方であります。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、
ひとり子の苦悩にさえ顔を背け、罪人に目を向け給うた、父なる神の愛、
自らを救う道を断ち、苦き杯を残らず飲み干し給うた、主イエス・キリストの恵み、
開かれた救いの門をくぐり、神の許へと歩み出させ給う、聖霊の親しき交わりが、
我ら一同と共に、とこしえにあらんことを。